

# 学内六報

2018.1.25

no.1506



『南總里見八犬傳』(総合図書館蔵)



2018年は  
成年だワン



ニューロインテリジェンス  
国際研究機構、発足

2017年度 業務改革総長賞

生命科学と情報科学をつなぐ東大で2番目のWPI拠点

# ニューロインテリジェンス 国際研究機構、発足

東大に2つ目のWPI（文部科学省の世界トップレベル研究拠点プログラム）拠点が誕生しました。その名はニューロインテリジェンス国際研究機構（IRCN）。掲げる問いは「人間の知性はどうのように生じるか」。生命科学、医学、言語学、数理科学、情報科学が融合する新学問分野を目指す機構の概要について、12月17日に開催された第1回国際シンポジウムの模様からとります。

How does human intelligence arise?

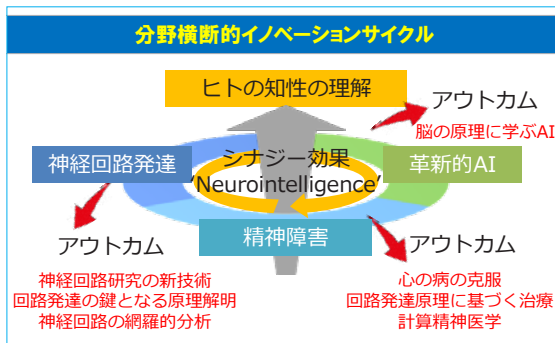


IRCN機構長

タカオ・ヘンシュ

1966年に東京で生まれ、2歳でアメリカへ。父とはドイツ語、母とは日本語、家の外では英語で話しながら成長。ハーバード大学を卒業後、東京大学医学系研究科へ留学。マックス・プランク研究所、カリフォルニア大学サンフランシスコ校、理化学研究所を経て、2006年よりハーバード大学教授（脳科学センター、ボストン小児病院）。

↓IRCNが標榜するイノベーションサイクル。神経回路発達、精神障害、革新的AIのシナジー効果により、人間の知性を解明する。



## 脳の神経発達という切り口から究極の問いに迫ります

「宇宙の起源は何か?」「なぜ生物は眠るのか?」というふうに、WPI拠点のテーマはいずれも野心的です。IRCNでは「人間の知性はどうのように生じるか?」という究極の問いに焦点を合わせ、現代科学の最大のフロンティアに挑みます。

近年の人工知能の進歩は圧倒的ですが、コンピュータが問題を処理する方法は人間とは違います。膨大な機械学習を前提とするコンピュータと違い、人間の脳は開発にあまり手間がかかりません。幼児の脳が非常に短期間のうちにめざましい発達を遂げることは皆さんご存知のとおりですが、ここに人間の知性を特別なものにする謎が隠されているのです。Alpha Goを開発したDeepMindの創始者デミス・ハサビスは、「人間の脳は私たちが構築しようとする知性が可能であることの唯一の証拠だ」と言いました。脳のように、より人間的でより効率的で、微量の電力で動く次世代AIを作るには、人間の脳に目を向けるべきです。

基本的な神経発達の原理を発見し、脳

の発達原理に基づく革新的AI技術を開発し、神経発達障害の病理を明らかにする。このサイクルを繰り返すことで人間の知性を解明したいのです。私たちは、神経回路形成、神経回路における技術開発、精神障害、AIという4分野をつなぎます。異領域にまたがる

優秀な研究者のネットワークを一つ屋根の下につくります。本郷には、精神病患者さんに接することができる附属病院を含め、多くの研究者がいます。駒場や柏も合わせることでこのネットワークはより大きくなるでしょう。

国際的な拠点となることも重要です。研究面では、例えば最先端の神経回路解剖技術を持つマックス・プランク研究所や、私が所属するハーバード大学ボストン小児病院との提携を進めます。もう一つの特徴は教育面です。東大とハーバード大の学生交流を促進するプログラムを始め、工学、生命科学、数学と様々な分野の学生を行き来させます。IRCNは学生たちの頭脳を効果的に循環させるメカニズムとしても機能するはずで

このような活動を進める上で、IPMUという頼もしい先輩がいてくれるのは幸運です。また、私たちは人文社会科学との連携も始めます。この取り組みは、教育学、経済学、社会学といった分野にも密接につながります。望むのは、超学際的な方法で前進することです。精神疾患の根底にある神経発達の重要な原則の解明、ビッグデータ分析に貢献する機械学習の開発、脳の原理に基づく次世代AIの開発を、互いにフィードバックさせながら進めていきます。この反復的なプロセスを通して、ニューロインテリジェンスという新しい分野が今後10年間で社会に結びつくことを願っています。

# 1 IRCN


International Research Center for Neurointelligence




## 8 機構メンバー

**技術開発  
ユニット**


**発達研究コアユニット**



**榎本和生**  
理学系研究科




**後藤由季子**  
薬学系研究科




**酒井邦嘉**  
総合文化研究科


機構長




**岡田康志**  
理学系研究科




**大木研一**  
医学系研究科




**狩野方伸**  
医学系研究科





**Takao Hensch**  
ハーバード大学・  
ボストン小児病院




**笠井清登**  
附属病院




**Takao Hensch**


**神経発達障害  
病態研究ユニット**




**岡田康志**  
理学系研究科




**竹内昌治**  
生産技術研究所



**上田泰己**  
医学系研究科



**杉山 将**  
新領域創成科学  
研究科



**合原一幸**  
生産技術研究所

**数理情報システム  
ユニット**

①当日会場の伊藤国際研究センターでお披露目されたIRCNのロゴマークは、ヘンシュ機構長が下書きしたイメージ図を元にデザインされたもの。左側の脳が生命科学を、右側の電子回路は情報科学を象徴しています。「R」の一部が「?」になっているのもポイント。

②開会挨拶を述べる五神真総長。IRCNへの大きな期待を語るとともに、IRCNが東大の研究機構として恒常的に活動していけるよう総長として支援していくことを力強く約束しました。

③祝辞を述べる関靖直 文部科学省研究振興局長。

④祝辞を述べる宇川彰 日本学術振興会WPIプログラム・ディレクター。

⑤村山 斉 カブリ数物連携宇宙研究機構長は、コーヒーブレイクのタイミングを利用して会場の空気を温めた後に講演。「宇宙はどのように始まったか」との難問に挑む機構の活動を紹介しながら、WPIの弟分の誕生を歓迎しました。

⑥柳沢正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構長は、睡眠の謎を解く研究について紹介。睡眠時間が最も足りない都市である東京を象徴する写真の提示に会場が大きく反応しました。

⑦午前の部を締めくくる記念撮影には110人を越える参加者が顔を揃えました。

⑧始動したIRCNの現時点での顔ぶれ。ランチタイムの後に行われたセッションでは、IRCNが視野に入れる3つのテーマでディスカッションを展開。「Basic」のテーマでは榎本副機構長が、「Computational」のテーマではヘンシュ機構長が、「Human」のテーマでは狩野副機構長が順に司会役として登壇し、機構メンバーとともにニューロインテリジェンス研究の一端を紹介しました。

約400名の教職員が表彰式でアイデアを共有

# 2017年度 業務改革総長賞

2017年度業務改革総長賞の表彰式が、12月15日に安田講堂で開催されました。全24件から選出された総長賞2件、理事賞2件、特別賞3件に対し、五神真総長と戸渡速志理事（業務改革担当）から表彰状と副賞を授与。受賞者によるプレゼンテーションが行われ、参加した約400名の教職員が、受賞を祝うとともに、優れた業務改革のアイデアを共有しました。



## 総長賞 ハラスメント防止教育の普及によるリスクマネジメント



### カブリ数物連携宇宙研究機構事務部門

#### 取組内容・成果

教職員自らが映像編集を学びながら防止教育ビデオ（英語版）を制作し、ハラスメント相談所の監修を受けてクイズ、確認書をセットにしたE-Learningを構築。部局内の運用を経た後、ハラスメント相談所HP、東大ポータル便利帳から全部局の教職員が利用できるよう環境を整え、コンテンツの全学提供を開始した。

#### 評価のポイント！

教職員の教育機会の充実  
大学国際化への対応強化  
当初から全学運用を想定し展開まで実現



代表者／  
田村利恵子さん

※「大学グローバル化へのWin-Winプロジェクト」で2016年度特別賞を受賞。

きっかけはあるロシア人教授から聞いた話でした。米国でエレベーターに乗った際、後から女性が入ってきたので、彼はドアを押さえて待ちました。目が合ったので、「どういたしまして」という意味でウィンクすると、女性はすごい剣幕で怒ったそうです。ロシアでは普通でも米国ではハラスメントだ、と。

責任の所在はどこでしょうか。もし彼が東大の教職員でハラスメントが認定されたら、東大が社会的制裁を受けるので

しょうか。問題は、雇用主が防止措置を怠ることでした。そこで、外国人向けに英語での講習を考えましたが、忙しい研究員が参加できるとは限りません。ならばEラーニングだと思ったのです。

今回の取組にはポイントが4つあります。事務職員のチームワーク、研究員の協力、ハラスメント相談所の監修、そして業務改革総長賞の存在です。この制度のおかげで、日々の業務をこなしながら新提案に臨むことができました。また、

前回の副賞\*を使って映像編集を学び、制作を迅速化できました。一つの業務改革が他の業務も進め、新たな業務改革提案につなげることができたと思います。

大学の国際化と同時に進めないといけないのがリスクマネジメントです。ハラスメント防止教育を全学で徹底することを提案します。外国人教職員が少ないために英語の講習が難しい場合、逆に多いために全員参加の講習が難しい場合、ぜひこのEラーニングを活用ください。



### 総長賞を受賞した “E-learning for Sexual Harassment Prevention” は 教職員ならいつでも受講できます

[http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 倫理・ハラスメント](http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/倫理・ハラスメント)

制作に際し、「見た人が不快に感じない」「研究員に露骨なハラスメント役をさせない」という2点を機構長から希望された制作班。体に触る場面では、被写体をネコにする案を採用。体に関するからかいの場面は、尻尾が取れたサル（の衣装を着た田村さん）で表しています。そんな工夫が詰まった一作は、6月に運用を開始し、10月からは全学で利用できる形に。映像10分、クイズ10問、確認書提出がセットのハラスメント防止講座。受けないとレッドカードかも。

# 総長賞

## 研究者情報管理システムの構築と全学共同利用に向けた取組



### ➡ 研究者情報管理システム WG <工学系研究科 >

#### 取組内容・成果

研究者の業績、活動内容を効率よく集積、活用する研究者情報管理システムの構築が急務となる中、教員評価機能を搭載したシステムを開発し、運用を開始した。教員のデータ入出力及び事務職員のデータ収集業務が大幅に省力化され、教員評価を円滑に実施する環境が整えられた。

#### 評価のポイント！

- 教員の教育研究時間の確保
- 事務職員の業務量削減
- 教員評価の効果の実施に関する先導的役割としても期待



代表者 / 高橋 登さん

Relation (学内外の関連データ利用)、Reduce (業務の削減、ペーパーレス)、Reconstruction (蓄積データの再構築、活用) を基本理念として研究者情報管理システムを開発しました。業績データは、Pureやresearchmapなどの外部データから一括登録でき、メ

モ機能による容易な登録も可能です。データ出力に関しては、科研費申請書用の出力機能やWebサイト自動構築機能を備えました。データを連携させることで、学生数、論文数、研究費の件数・金額、外部資金獲得状況など、様々な統計データの出力も可能です。教員評価機能にお

いても蓄積された業績データを参照しながら自己評価及び各段階の評価を進めることができ、また、事務職員の業務を削減する工夫も取り入れました。本システムは全学共同利用も念頭に構築しました。既に他部局でも操作を体験いただき、導入が検討されています。

## 理事賞 ファイル配付らくらくツールの作成

(Excelマクロによるファイル配付作業の効率化)

### ➡ ファイル配付らくらくツール作成プロジェクト

#### 取組内容・成果

マクロを利用し、①Excelデータを対象者ごとに切り分け、②ファイル転送サービスにアップロードし、③メールを作成する作業を効率的に行えるツールを作成し、共有した。



## 理事賞 学生経済支援管理システムの構築

~学生への経済的支援状況の見える化、共有化を目指して~

### ➡ 学生経済支援管理システム WG <工学系研究科 >

#### 取組内容・成果

担当ごとに異なるフォームで管理されていた学生支援関連の様々な情報を集約、管理するシステムを構築し、学生支援の全体像や個々の学生の状況を把握できるよう改善した。



#### 業務改革総長賞受賞課題一覧(過去5年分)

2016年度	附属病院・多職種で目指す英語対応能力向上への取り組み一書籍『東大病院発！医療スタッフのための英会話』の発刊ー 図書館ツアアのセルフ化に伴う業務削減と学生・留学生サービスの向上
2015年度	取引先データ登録フローの改善による業務効率化 人事異動における業務フロー見直しへの取り組み～着任当日から教員に研究教育活動を始めていただくために、実践していること～
2014年度	国際交流事業に係る各種手続きの電子化ー1週間を要する作業が5分で可能にー 留学生向け銀行口座開設支援臨時窓口の設置
2013年度	英語版安全教育ビデオと確認テストのWeb配信による外国人研究員・学生への安全教育の徹底 「図書館ひっこしらくらくキット」～配架計画支援アプリ『連番くん』及び『書架棚見出し出力器』の作成による図書館の引っ越しに伴う作業の効率化～ 専用ウェブサイト構築による会議資料の統合管理
2012年度	柏地区における事務業務の整理・再構築と教職員向け事務手続きサイトの開設

2006年度に始まり、12回目を迎えた業務改革総長賞。過去の提案の中には後に日常業務として根付いたものも多数。ちなみに、初年度の総長賞は「柏キャンパス高圧ガスボンベ一括管理体制の構築」と「日常業務(固定資産会計)に関するマニュアルの配布」でした。

## 特別賞

### 国立大学附属病院における医療材料共同調達(交渉)の実施

#### ➡ 医学部附属病院管理課経理チーム(国立大学附属病院共同調達実施事務局)

### 一石二鳥! タクシー管理体制見直しでサービス向上&収益獲得

#### ➡ 医学部附属病院管理課施設管理チーム

### 契約事例集の作成

#### ➡ 契約事例集 WG <本部契約課 他 >

**業務改革推進室より** 今年も多数の改善成果を応募・推薦いただきありがとうございます。受賞課題以外にも業務の質を高める優れた取組が多数報告されていますので、各部署での業務再点検の参考としてぜひご覧ください。本制度は、表彰もさることながら、改善成果やそのノウハウを共有することを主目的としています。皆さんの身の回りの改善事例も、ぜひ積極的にご紹介ください。

●応募(推薦)課題の取組内容(過去のものを含む)は、東大ポータル・便り帳「業務改革(改善)に関する課題の一覧」をご覧ください。

教養教育の現場から

第25回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 56種の水の成分分析から始まる環境化学

／全学体験ゼミナール「身近な環境化学実習～身近な水を水質調査から科学する」

お話／自然科学教育高度化部門  
特任助教

堀まゆみ



— 様々な水を飲む授業……ですか？  
「身近な存在の水を科学的に分析して考える3日間の集中講義です。水には塩素や鉄やナトリウムなどが含まれますが、内訳は水によって違います。たとえば、硬度を左右するマグネシウム・カルシウムの量は採水地の地質に影響されます。水の成分にどんな違いがあり、その理由は何かを考えることから環境化学に目を向けてほしいと思って企画しました」

## 集めた水の総重量は約1トン！

「市販のミネラルウォーター、温泉水、自治体のボトル詰め水道水も含めて56種を集めました。ケース買いで全部で約30万円、総量は1トンほどありました」

— 1トン！ 授業の概略を教えてください。  
「初日は、水に関する基本知識を共有後、キャンパスへ。水飲み場、体育館の蛇口、給湯器の水など、気になる水道水をポリ瓶に採取してもらいました。サンシャイン60の高層階と低層階の水を採取してきた学生や、上向きの蛇口と下向きの蛇口で分けて採取する学生もいましたよ」

— 上向きだと埃などが入るんですね。  
「採取後、各自が選んだ10種類ほどの水を目・鼻・舌で利き水しました。段ボールの味がすると声もありました。次に簡易検査キットで成分分析。環境化学でよく使う「バックテスト」というもので、水を入れると成分量に応じて試薬に色がつき、指定成分の濃度がわかるんです」  
「2日目は、研究室レベルの高精度定量分析です。色の波長と濃さを判定する分光光度計を使い、今回は硝酸態窒素の量を計りました。肥料に使う、農学では重要な物質です。1人あたり約30種の水を対象にこの量を一つ一つ測定しました」

## 五感と分光光度計で水質を調査

「3日目は、硝酸態窒素がなぜ多いのかor少ないのか、水ごとに理由を考えて資料を各自作成し、発表しました。理由は複数の道筋から考えられます。山の質、畑の数、家畜の状態……。一概には正解が出ませんが、理由が論理的に考えられていればOKです。なぜかを考察するのが環境化学の第一歩。生物学も物理学も

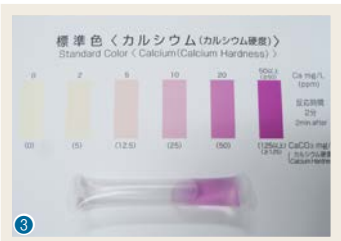
社会学も総動員して仮説を立て、検証する楽しさを味わってもらいました」

— 56種の水を扱う機会は滅多にないから受講者は面白かったでしょうね。

「分析を面倒がるかと思いましたが、きちんとやってくれましたね。私は環境汚染の研究者で、公園からの六価クロムを含んだ水の漏洩について調査したり、福島原発由来の放射性セシウムを調べたり、扱うのは汚染された水でした。きれいな水には詳しくなかったので自分も勉強になりました。「南アルプスの天然水」と「いろはす」を比べると、見た目は同じですが、味や成分に違いがあることがわかりました。ボトルの「東京水」と蛇口から出る水でも味が違って面白かったです。水に凝るようになって、同僚から「水ソムリエ」と呼ばれました」

「今回は参加者がより考察をしやすくなるようにしたいです。たとえば採取地が同じ水が複数あると比較がしやすいはず。自由すぎるとどうすればいいかわからなくなるので、自由な考察を導くようなところかかりを増やしたいと思っています」

①国内外から集めたボトル水。②簡易検査キット「バックテスト」と採水用のポリ瓶。③試しに「南アルプスの天然水」のカルシウムを測定すると20mg/Lでした。④2日目の高精度定量分析の様子。⑤分光光度計は研究室と同じレベルのものを使用。



# 総長室だより

第6回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

五神 真



## 「変化を楽しむ」～私の経験から～

今回は私の経験を例に、11月号で触れた「変化を楽しむこと」について話したいと思います。

一つ目は、2010年に工学部から理学部に移ったことです。工学部での22年間は充実していました。それでも移ったのは、人が動くことで新しい発想が生まれることを自ら示したい、と考えたから。研究室の引越は大変でしたが、この変化は非常によいものでした。

理学部と工学部では、学生にアピールするための伝え方が少し違いました。工学部では、「この研究にはこんな可能性や展開がある」と具体的に説明するのが効果的でした。理学部では、「この研究の価値は今わからないし、どう攻めれば良いかもはっきりしない。でも面白いので一緒に考えよう」という言い方に奮い立つ学生が多いようです。面白さの感じ方や反応が多様であることを実感しました。理学部に移ってから、学生諸君と新しい研究の種を沢山播きました。仕込みの時期でしたね。それが今、素晴らしい芽を出し始めています。変化を自ら起こした成果だと思っています。

二つ目は、総長になったことです。これまで無縁だった先生方に会い、未知の研究分野に触れる機会が増えました。これまで考えもしなかったことを考えるようになり、新しい視点や物差しを発見しました。文系諸学、例えば歴史学、法学、言語学など、分野の多様さとともに、新しい知を創るという営みがすべての学間に共通するのだということを実感しました。「東大再発見」に心が躍る体験ができるのは、総長就任の一つのご褒美かもしれません。

学外での出会いも増えました。最近では、孫正義さんの育英事業で一緒にいる将棋の羽生善治さんとの出会いが刺激的でした。永世七冠を達成した彼の凄さは誰もが知るところですが、将棋をより深く理解するためにAIという最先端技術にも躊躇なく挑戦する姿勢には学ぶところが大きいです。「変化を楽しむ」を体現するお手本だと思います。

総長であることは研究・教育にもプラスに働いています。自ら研究に直接関わる時間は減りましたが、視点が大きく広がり、学生や仲間に従来と違う助言ができるようになったと感じます。10月号で触れたように、時間スケールの捉え方は多様で、実学／基礎研究と長期／短期は2行2列で考えるべきである……など、様々な方と議論する中で、日々新しい発見があります。

進んで変化を起こすこと、挑戦することに意味がある、それが私の体験に基づく実感です。変化を楽しもう。このエールを体現する環境を創りたいと思っています。(つづく)

シリーズ

第10回

## 連携研究機構

ヒューマニティーズ  
センター (HMC) の巻



話／機構長  
齋藤希史先生

## 人文学研究の新たな広場に

——人文学をコアとした新たな学問領域を創成するための機構、ですね。創設の経緯を教えてください。

「ビジョン2020では、人文社会科学分野の振興が一つの柱となっています。そしてこの分野においても研究時間の劣化への対処が大きな課題です。サバティカル・リーブの制度は設けられていますが、条件が整わない場合があることも事実です。そこで、教員が一定期間他の業務を軽減して研究に専念する場をつくり、東京大学の人文社会科学分野ならではのポテンシャルを発揮する仕組みができないか、検討していました」

「そんな折、新図書館計画とも関わって、人文学の振興に役立てたいとのお寄附のお話がLIXIL会長の潮田洋一郎さんからありました。隣接分野も視野に入れた構想を具体化して提案し、ご賛同いただいたのが一昨年です。学内調整を経て、人文社会系、法学政治学、総合文化、教育学、情報学環、東洋文化研究所、史料編纂所、附属図書館という8部局連携で昨年7月に始動しました」

——すでに2つのプロジェクトが稼働中なんですね。

「『学術資産としての東京大学』は、教育・研究機関としてのみならず近代の学術資産として東大を捉え直す試みです。150年史編纂に向けて整理が進む大学史史料を活用する意図もあります。もう一つは『21世紀における共生の理論と実践』。駒場のUTCP（共生のための国際哲学教育研究センター）と連携し、哲学・思想の国際協働と文理融合の学際研究を目指しています」

——「公募研究」という形もあるようですが。

「連携部局の所属教員を対象に企画を募り、センターが選考して進めるプロジェクトです。審査のための書類の負担も軽くしました。先日、来年10月から1年の予定で始める7件を採択しましたが、結果的に若手の先生が中心となり、古典、近世、戦後から現在と長い時間軸をカバーする内訳となりました。共同研究をする国外の研究者の招聘費を手厚くし、教員が研究に専念するための部局協力経費を用意します。寄附金を使ってこうした取組みを行うのはおそらく初でしょう」

——大学の働き方改革の先鞭となりましょうか。

「そうなるというですね。ポストが減り業務が増えているからこそ、こうした場が必要なのだと思います。意識を変える頃合いではないでしょうか」

「来年度からはセンターの活動も本格的にスタートし、企画研究や公募研究の先生方とともに共同セミナーやシンポジウムなどを頻繁に実施していく予定です。多くの研究者が集い、相互の刺激で新しい研究が生まれる広場のような空間に育てたいと思います」

[hmc.u-tokyo.ac.jp](http://hmc.u-tokyo.ac.jp)

↓できたてのロゴマーク



## ワタシのオシゴト 第141回

RELAY COLUMN

物性研究所  
事務長 矢作直之

## 本音で語れば、未来が見える♪



癒しの物性犬と紫=物性イメージカラーに囲まれて♡

昨年60周年を迎えた世界のISSP=物性研は、物性科学の最先端を推進し社会的に重要な材料やデバイス開発への貢献を目指す共同利用・共同研究拠点です。

自分自身の社会人第一歩が1980年代、スクエアビルへ出会いを求めて気分高揚な若者であふれかえった六本木交差点アランド前からはほど近い六本木キャンパスに存在した当時の物性研究所です。

昨年度、約30年ぶりに箱で再び物性研職員となり、感じたことは、物性カラーは「変わっていないなあ」。

教職員間の距離感がものすごく近く、「将来の物性研にとって良い方向は……〇〇だ」「いやいや□□の方だ」と(かなり)本音で語り合う物性愛の文化が根付き、その場で同じ空気を吸うことがとてもプラスになります。また、事務への期待も感じる事が多く、その分、信頼を裏切らないよう情報発信に努め、職場環境の風通しを良くし、目指す方向への共有化に向けて、この組織の力になると思う雰囲気を盛っていくことが自分の仕事なのではと思っています。



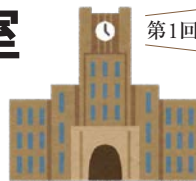
社内報=「家族or趣味」やっぱ全部盛り!

得意ワザ：妄想の癖がすごい!

自分の性格：まさに魚座B型な感性系黒ひょうキャラ  
次回執筆者のご指名：小林茂さん(同姓同名多そう)  
次回執筆者との関係：IMOスキー飲み会から四半世紀  
次回執筆者の紹介：それ以来、繁華街(?)ではエース級!

IRデータ室  
よもやま話 第1回

本部IRデータ担当課長 青木志帆



## はじめまして、IRデータ室です!

みなさん、こんにちは! 私達は、学内の計画策定や意思決定などの支援に向けた情報を取り扱うため、昨年4月に総長室の下に設置されたIRデータ室と申します。「はあ? なんや、けったいな名前やなあ。そないなモンなんで必要なん?」。成程成程。それでは、ご説明しましょう。

2004年の法人化以降、急速な社会的・経済的環境の変化は東京大学の経営基盤を大きく揺るがしました。一方で人口・環境・資源問題など地球規模の課題解決のため、大学の教育力、研究力に対する社会からの期待は年々高まっております。期待に応えるためには、当然学内の諸問題—女子学生比率の向上や、教員の研究時間の確保、若手研究者の雇用安定化など—も解決しなければならない。解決には安定的かつ自律的な経営基盤の構築はもちろんのこと、今ある限られた資源を有効活用しながら、効果的・効率的な意思決定が必要です。もちろん、その意思決定は「なんとなあく」ではなく、様々なデータ分析によるエビデンス(証拠)に基づいて行うことが求められます。その際、活用されるデータがIRデータというわけなのです。

IR (Institutional Research) とは「大学の教育、研究、社会貢献活動、およびそれらを支える大学経営を改善するための調査研究活動」のこと。活動には、学内にある教育・研究活動の実態を表す、ありとあらゆるデータ(それこそ、みなさんが日々現場で接しておられるデータも!)が必要なため、IRデータ室には室長、副室長(5名)の他に本部の各事務組織から選ばれし18名の室員が所属するIRデータ室会議(審議担当)と、34名のメンバーが所属する教学・研究・社会連携・管理運営の4部門に分かれた部門別IR担当者会議(作業担当)が設置され、お互いに協力しながら、データの収集・分析等を行っております。

とはいえ、オギャアと産まれてまだ10か月。トライ&エラーの毎日ですが、「公正で公平な大学秩序の確立と経営力の強化」「国民への希望と安心の提供」を旗印に、切磋琢磨、一心精進しながら、東京大学の経営改善のため一歩ずつ前進しております。そんな私達の試行錯誤の様子やIRにかける思い(♡)を、IRデータ室のコアメンバーからお届けする『IRデータ室よもやま話』。どうぞよろしくお祈りします!



動画「今日の学びは明日の光! 大学戦士トーダインと目指す温かいディスクロージャー」より

IRデータ室 ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



# インタープリターズ・ バイブル

第126回

総合文化研究科教授  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

長谷川寿一

## 科学技術と社会に関する世論調査

内閣府は2017年11月27日に「科学技術と社会に関する世論調査」の結果を公表した。この調査は総理府時代の1976年以来10回を数え（今回は7年ぶり）、国民の科学技術に関する意識の動向を知る上で重要なものである。昨年のこのコーナーでも書いたが、2005年に本インタープリター養成プログラムが設立された背景には、当時、上記調査をはじめ国民の科学離れを示すデータが数多く挙がり、それを防ぐことが本プログラムのミッションであった。では、近年の国民の科学技術に対する意識はどう変わったのだろうか。

最も基本的な調査項目の一つは、科学技術に関する情報に対する関心度である。1976年の調査では関心があるという回答率がほぼ60%であったが、その後40年間は50%台半ばを上下し、本プログラム設立直前の2004年は53%とたしかに相対的に低い水準であった。しかしその後、2010年の調査では、過去50年間で最高の63%まで上昇し、今回も61%と高水準を維持している。この間、ノーベル賞の受賞が相次ぎ、はやぶさの帰還等科学ニュースが話題に上ることが多かったことが背景にあるのだろう。

ただし科学情報に対する関心度で注意したいのは、顕著な世代差があることである。1976年の調査で関心度が一番高かったのは20代だったのだが、1990年代以降のすべての調査で30歳未満の若者の関心度が最低だった。今回の調査で関心度が最も高かったのは60代（1976年当時の20代、筆者ら鉄腕アトム世代）、次いで50代であり、老若低傾向が顕著である。国立教育政策研究所による調査では、小学生の「理科が好き」という回答率は他教科よりも高いものの、中学生になると急減し、「理科の勉強は役に立つ」という回答率は、小中を通じて非常に低い。14歳を対象としたTMMSと呼ばれる算数・数学および理科の教育に関する国際調査でも、日本の中学生の理科好きは最低水準である。

まとめると、国民全体としては、近年、科学に対する関心度は高まっているが、若者の科学離れは依然として続いているように思われる。詳しく述べる余裕はないが、男女間にも関心度に顕著な差が見られる。今回の調査でも、科学技術情報への関心度が男性では70%なのに対して、女性では52%に過ぎず、20代女性に限ると40%まで落ち込む。子どもや若者、女性に対して科学の魅力をどう伝えるかが大きな課題である。手前みそで恐縮だが、人間科学や心理学などソフトなサイエンスはもっとアピールするべき分野だろう。

[science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp](http://science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp)

# 救援・ 復興支援室 より

第69回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、  
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

## 救援・復興支援室の活動(12~1月)

12~1月 岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

### ザシキワラシの日常④

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤克憲

岩手県内の本学関係施設は、東日本大震災直後に設置された当分室外に、1973年に設置された大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター（設置当時の名称は海洋研究所附属大槌臨海研究センター。以下「沿岸センター」と記します）があることは御存知の方も多いと思います。当分室設置に際しては、当時沿岸センター職員だった方に御尽力いただいたこともあり、その後も両者は、職員の交代がありつつも密接な関係を続けています。

両者は定期的に情報交換の機会を設け、当分室から沿岸センターへは本学復興支援活動等の情報を、沿岸センターから当分室へは大槌町及び沿岸センターの復興状況等の情報を、それぞれ提供し合っています。岩手県沿岸部での用務に合わせ、当分室から沿岸センターへ行って実施することが多いのですが、去る12月8日は沿岸センターから職員2名にお越しいたいで実施しました。きちんと議題を決めて、という形にすると思いきや、いつも事前に議題は決めないようにしているのですが、今回は本年度中に竣工予定の沿岸センター新棟建設の進捗状況や、本年度末の当分室閉室を受けての当分室から沿岸センターへの物品や車両の譲渡等が話題となり、充実した情報交換となりました。

当分室は閉室へ向けてこれから更に慌ただしくなることが予想され、この情報交換もあと1、2回できるかどうかといったところですが、この定例の会だけでなく最後まで緊密に連絡を取り合っ、沿岸センターの新棟完成と当分室閉室それぞれが滞りなく完了するよう努めたいと思っています。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左)情報交換会の様子(遠野分室内にて)。(右)左から沿岸センター佐藤係長、私、同センター菊地専門職員。

[www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html)

**トピックス** 全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
12月11日	カブリ数物連携宇宙研究機構	第2回「やっぱり物理が好き！～物理に進んだ女子学生・院生のキャリア～」を開催	11月18日
12月11日～1月9日	広報室	フィールドスタディ型政策協働プログラム／田無病院との協働による高齢者のリハビリ農作業／まちばの健康プロジェクト／高島平プロジェクト（「淡青」35号より）	9月8日
12月14日	本部国際企画課	第3回日墨学長会議が開催されました（広島）	11月30日
12月19日	本部総務課	2017年度業務改革総長賞表彰式	12月15日
12月20日	医科学研究所	第12回研究所ネットワーク国際シンポジウムが開催されました	11月28日
12月22日	本部人事給与課	「平成29年度東京大学卓越研究員」21名決定	12月13日
12月26日	総合文化研究科・教養学部	国連本部にて、本学学生がSDGs達成に向けた「協力者カミングアウト」を提案・発表	12月1日
12月27日	医科学研究所	医科学研究所創立125周年・改組50周年記念式典・記念講演会が開催されました	11月29日
12月27日	本部学生支援課	競技ダンス部が全日本学生競技ダンス選手権大会で5連覇を達成！	12月10日
1月1日	広報室	2018年五神総長年頭挨拶	1月1日
1月4日	本部国際企画課	タイ王国チュラポーン王女殿下が本学を訪問	12月22日
1月4日	ニューロインテリジェンス国際研究機構	ニューロインテリジェンス国際研究機構（IRCN）第1回国際シンポジウムの開催	12月17日
1月9日～10日	広報戦略本部	人生の軸となる古典文学の復興を目指す／「自分とは何か？」という難問に生命科学から迫る（UTOKYO VOICES）	11月1日～9日



## CLOSE UP 平成29年度「東京大学卓越研究員」に21名が決定 （本部人事給与課）



当日は21人中19人が参加しました。



期待を述べ、支援を表明する総長。

卓越した若手研究者の一層の自立を支援することを目的とした「若手研究者自立支援制度（東京大学卓越研究員）」により、学内の研究科及び研究所等から推薦のあった43名に対し、推薦書及び研究業績などに基づいて審査が行われ、「平成29年度東京大学卓越研究員」21名を決定しました。昨年度から開始されたこの制度は、採用後3年以内の若手PI（principal investigator：研究室を主宰、又は独立して研究テーマを設定・遂行する者で原則40歳未満の研究者）を対象に、スタートアップ経費（300万円／年）を2年間支援するものです。

12月13日には、「平成29年度東京大学卓越研究員」と総長との懇談会を安田講堂特別会議室で開催いたしました。総長からは今後の活躍への期待、東京大学卓越研究員からは謝辞と各自の研究内容及び今後の抱負などが述べられ、予定時間を超えて活発な意見交換が行われました。

また、有期雇用の優れた若手研究者の雇用安定化、人材育成等の取り組みを促進・支援することを目的とした制度により、申請のあった3部局に対し、対象となる若手研究者の支援に使用可能な雇用安定化促進経費（300万円／年）を3年間支援することを決定しました。

## 表紙について

実は本誌には新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する伝統があります（1978年1月発行の392号から）。吉例に則り、総合図書館が所蔵する『南総里見八犬傳』（曲亭馬琴編、柳川重信画／山青堂／南葵文庫／E24:1322）から、第3輯の表紙を掲載しました。文化11年（1814）から27年4か月かけて刊行された本作は、室町時代を背景に南総里見家の興亡を描く全98巻の長編小説。神犬八房の

氣に反応して伏姫が生んだ八犬士の名にはそれぞれ「犬」の字が付いており、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の玉を持っている……なんてことは、すべて総合図書館のホームページ（[www-old.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/2005\\_04/](http://www-old.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/2005_04/)）からの丸写し。2006年2月～3月、干支にちなみ、所蔵する「犬」関係資料を集めて行われた展示の記録です。他にも、桃太郎、三才図会、犬追物、犬百科、紀伊徳川家16代当主寄贈のドイツの狩獵本などが展示された模様。図書館の奥深さを感じたい犬好きは必見だワン！



右は小犬の微妙な表情が気になる「今様八犬傳」第二編の表紙（二世為永春水作、一勇齋国芳画／青洲文庫／E24:1019）。実物は書庫で確認可。



CLOSE UP

本学学生が国連本部でSDGsを推進する活動を発表 (総合文化研究科)



you are doing around the world on issues of making alerts for persons with disabilities. The next speaker

プレゼンを行う飯山さん (世界に中継された画面より。右は手話通訳)。



パネルの様子はUN Web TV (webtv.un.org) から視聴できます。

12月1日、国連ニューヨーク本部で開催された「災害や紛争時の障害者の権利に関するパネル・ディスカッション」に、医学部3年の飯山智史さんと工学部3年の町田紘太さんが世界の若者代表として招かれ、文化・芸術を通してSDGs達成を目指す「東京大学EMPOWER」の活動を紹介しました。彼らは、全学自由研究ゼミナール「国連と文化」の受講生などで結成された学生団体「UNiTe」のメンバーを中心に、教養学部教養教育高度化機構のプログラムの一環として活動しています。

発表では、SDGsが目指す「誰一人取り残さない」社会の実現のために、「物理的」アクセシビリティの向上に加え、一人一人の「態度」や「行動」のアクセシビリティ向上を目指す

必要があることを紹介。これまで一般的だった、妊産婦、障害のある方、高齢者等の「当事者」カミングアウトに加え、「協力者」の側がマークなどでカミングアウトを行う社会作りを提案し、インクルーシブでアクセシブルな世界の実現に向けた連携を呼びかけました。

「東京大学EMPOWER」は、11月に東京ミッドタウンDesign Touchでレゴを使ったワークショップを行った他、駒場祭ではバッジ等を作成するイベントを通して700人を動員。12月には駒場でユニセフ・ウィークを実施しました。募金活動の他、駒場正門前をUNICEFカラーの青と、EMPOWERのシンボルカラーであるマゼンタの灯籠でライトアップしました。今後もSDGsの達成に向けて活動を続ける予定です。



CLOSE UP

医科学研究所創立125周年・改組50周年式典を開催 (医科学研究所)



村上善則所長の開会の辞。



記念シンポジウム講師との記念写真。

11月29日、医科学研究所は創立125周年・改組50周年記念式典、記念講演会、記念祝賀会をシェラトン都ホテル東京にて開催しました。

冒頭、村上善則所長が医科研と感染症・生命科学の歴史について総括し、今後の挑戦への決意を述べました。五神真総長からは、今後も革新的な研究に挑戦し、社会とアカデミアに貢献するようとのメッセージを頂きました。続いて来賓の関靖直文部科学省研究振興局長、梶田隆章国立大学附置研究所・センター長会議会長、宮園浩平医学系研究科長、末松誠日本医療研究開発機構理事から祝辞を頂きました。記念講演会では、岩本愛吉名誉教授・日本医療研究開発機構戦略推進部長から「日本の感染症対策の歴史と傳研」、梶田隆章卓越教授・特別

名誉教授から「神岡での研究を通して考えること」、大村智北里大学特別名誉教授から「微生物創薬と国際医療貢献」の講演が行われ、記念祝賀会には学内外から約300名が出席しました。

11月30日には、医科学研究所講堂において、「医科学の新発見がもたらす医療のパラダイムシフト」をテーマに創立記念国際シンポジウムを開催し、米国メモリアル・スローンケタリング癌センターのMichel Sadelain博士、大阪大学免疫学フロンティア研究センターの長田重一教授の講演に加え医科研の中西真、河岡義裕、宮野悟各教授によるがん、感染症、ゲノム医学領域の先端的研究成果発表がありました。夕刻には所内祝賀会が開かれ、大勢の参加者と共に賑やかに周年を祝いました。



CLOSE UP

競技ダンス部が全日本学生選手権で5連覇を達成! (本部学生支援課)



ワルツの部、高木・片岡組。



サンバの部、相川・山本組。

12月10日に獨協大学35周年アリーナにおいて行われた「第62回全日本学生競技ダンス選手権大会」(通称:冬の全日本戦)において、本学運動会競技ダンス部が団体優勝をおさめ「冬の全日本戦」5連覇を達成しました。

競技ダンスとはスポーツ化された社交ダンスであり、ワルツやタンゴといった8種類の音楽に合わせて男女がペアとなって踊り、その美しさを競います。今大会では、出場権を得た54の大学が全国から集まり、音楽ごとの8部門に分かれて選手たちが争いました。「冬の全日本戦」は各部門に大学から1組の選手しか出場できず、エース同士が戦う一年間で最もレベルの高い大会と言われています。

本学競技ダンス部は、今回出場した8組全員

が入賞(ベスト12入り)を果たし、さらにワルツの部で高木・片岡組(工4年、法4年)、タンゴの部で高橋・白櫻組(工3年、日本女子大学3年)、スローフォックストロットの部で上田・栗田組(経済4年、跡見学園女子大学4年)、サンバの部で相川・山本組(工4年、日本女子大学4年)、パソドブレの部で高木・永井組(農4年、東京女子大学4年)、合わせて5組が各部門で個人優勝し、優勝者が観客の前で披露するオナーダンスを踊りました。この結果、過去最多得点により団体優勝をおさめました。これまでの「冬の全日本戦」最多連続優勝記録は5連覇であり、2018年に再び本学競技ダンス部が団体優勝を果たせば、この記録を更新することができます。応援よろしくお願いたします。



## フィールドワークの思い出—私が好きな韓国の言葉

ジャーナリストの故・吉岡忠雄は、韓国人がふともらす言葉で一番好きなのは「クレド・サラヤジ」（それでも生きなくちゃ）だと著書に記した。私が一番好きな韓国語は「イゴット・チェミジ」。これも一興さ……。

私は93年秋から軍政時代における韓国民主化運動の研究を始めた。政治的に安全とは言えないテーマである点は重々自覚していたが、ある時、うっかり手配中の学生運動のリーダーと接触してしまったことがあった。その夜、私の旧知を名乗る見知らぬ二人組が突然ホテルを訪ねてきた。韓国と日本での私の行動を逐一言い当てた上、とにかく外に出ましよう、お酒を一杯つきあってくれたら僕らの正体を教えてあげますよ、としつこくつきまとう。なんとか二人を追い返した後、さすがに気味が悪くなり、80年代以来お世話になってきた崔来沃・漢陽大教授に思い余って電話をかけた私は、すぐに来なさいという言葉を受けて真夜中にタクシーを飛ばした。

崔教授は私の話を一通り聞くと、こう言った。「帰国までの間、毎日教会に通い、身を潜めなさい。公権力も教会にまでは踏み込めないから」。

私は帰国までの三日間、知人が通っていたメガチャーチに身を寄せることにし、毎朝バスで教会へ出向き、深夜にホテルに戻った。その間、心配した崔教授が、地方での民俗調査の帰りに訪ねてきた。玄関に鞆を置き、私を見つけて二言三言ことばを交わした、ほんの10分ほどの隙に、彼の鞆は消えていた。カメラ、録音機、フィールドノート……調査の成果の一切切を鞆ごと盗まれたのである。余りの申し訳なさに色を失った私に、彼はにっこりと笑いかけて言ったのだ。

「イゴット・チェミジ……」。

韓国の教会はまさにアジールであった。だが、そこに韓国キリスト教の強靱さの秘密を見た気がした。そして「イゴット・チェミジ」の一言に、崔教授に実を結んだ信仰者の救しを見たような気がした。あの日以来、吉岡の「クレド・サラヤジ」とともに、彼の「イゴット・チェミジ」は忘れ得ぬ韓国語のフレーズになった。

96年秋のことだ。

真鍋祐子  
(東洋文化研究所)